

アーカイブ Data Report NO. 23

(2020年7月15日)

〒500-8813 岐阜県岐阜市明徳町10番地 杉山ビル5F
E-mail: shikaku@npo-nak.com URL: https://npo-nak.com

オーラルヒストリーの利活用の課題②

～仲本實先生が小学生のときに体験された沖縄戦についての聞き取りと記録～

眞喜志 悦子 (岐阜女子大学)

沖縄戦の戦中戦後に小学生であった仲本實先生に、米軍の上陸前後から収容所までの戦争体験を子どもの視点でオーラルヒストリーとして聞き取りをして、デジタルアーカイブ化した。その聞き取りの経緯や方法についてまとめる。

1. 話されるにはお互いに信頼関係が必要

沖縄戦が終結から75年が経過し、当時の小学生だった人々は85歳前後になられている。現在、沖縄戦については“語り部”と呼ばれる方々が話されている場合が多いが、そうではない一般の方が周囲に沖縄戦についての自身の体験を話される機会は少ない。戦争体験のように、人は困難・悲慘を極めた状況の話をするには、よほど心が通じ合う間柄になってから話される場合が多いからである(仲本實先生も後藤忠彦先生との約30年の付き合いの中で初めて話されることになった)。

また、本学の学生・院生の研究に携わるなかで、孫として祖父母から沖縄戦の話しを聞く事例が多数見受けられた。話しをされた祖父母は、これまで“子にも話したことがなかった”ということも少なくない。近すぎる関係でもなかなか話しづらいというようなことが影響しているかもしれない。

2. 話しの聞き取り方法

(1) 話しの構成

沖縄戦の戦中・戦後に小学生であった仲本先生の話された内容をまとめると次のようである。

戦前の生活からはじまり、戦争がだんだんと近づいてくる様子、戦中の避難生活、米兵の遭遇、収容所の生活などについて、話していただいた。

聞き取りの初日は、話の内容を細かく指定せず、仲本先生が作成された目次の通りに聞き取りを行った。

撮影は、当時の沖縄教育カレッジ(宮里祐光先生)のご好意で、防音室をお借りして2010年8月11日に収録を進めた。

(2) 収録方法および気をつけたこと

仲本先生から話しの内容に関係する資料の提供を受け、聞き取りの途中で、それらの資料を見せていただく形で、聞き取りを進めていった。聞き取りには、沖縄女子短期大学(当時)の稲福純夫先生と、本学院生であった照屋小百合、眞喜志が行った。また、撮影・記録には多くの教員や院生が支援してくださった。

オーラルヒストリーの構成

- 1) 昭和13～15年頃の生活
- 2) 戦争近づく
- 3) 最初の爆音
- 4) 再び山田国民学校へ
- 5) 10月10日の空襲
- 6) 昭和20年上陸戦争の前触れ
- 7) 4月1日米軍上陸
- 8) 家族は難民収容所へ
- 9) 山中での暮らし
- 10) 米軍の態度がだんだん険悪になってきた
- 11) 石川収容所と終戦
- 12) 宮森小学校時代
- 13) 浮浪者時代終わる



資料を見せながらお話しされた

聞き役は、仲本先生が話しをされている最中には意見を言わず、主に相槌を打つことに努めた。最も注意した点は、“音声の記録”と“話し手の表情が見えるようにする”ことである。



第2回目の収録（2011年2月）



第5回目の収録（2013年5月）

3. 関係資料の収集・整理

仲本先生からご提供いただいた資料としては、先生が当時通っていた小学校や、收容された石川收容所などさまざまな写真、カンカラ三線やソテツの実から採取したデンプンといった実物資料の他、当時の生活用品の展示を行っている石川歴史民俗資料館、恩納村博物館や、先生が戦中に実際に親族とともに避難されたガマ（自然壕）などへの案内などもしていただいた。これらの資料は沖縄戦を知る上で大変貴重な資料となった。（写真の利用については、各施設から使用承諾書をいただいた上で掲載しています）



（左）日常の食事メニュー



（右）シンメーナービ（恩納村博物館）



終戦直後のくらしと道具（石川歴史民俗資料館）



戦後すぐに米軍が設立した城前小学校（2013年）



1945年、首里（沖縄県立公文書館）



仲本先生が避難した恩納村山田にあるガマ